



# 東方弱虫録4

幻想戦闘記



プロローグ 生贄の行方

神社の境内の石段を上るのは日傘を差したメイド、咲夜と蝙蝠のような翼を持つ吸血鬼レミリアの姿だった。

レミリアは日光に当たると、灰となってしまいう為に従者の咲夜に日傘を差してもらわなければいけないのだが、彼女はそんな事も気にせず歩いているように思えた。

掃除をする巫女、博麗霊夢を素通りしてレミリアは賽銭を入れる。

「あんた……何しに来たのよ？」

この神社では妖怪達や吸血鬼のレミリアもひんぱんに訪れるが、賽銭を入れる事は珍しい事であった。

「賽銭を入れに来たのよ」

「珍しい事もあったものね。雪でも降るんじゃないかしら？ 勇気はどうしたのよ？ 元気でやってるのよ  
ね？」

その問いにレミリアはニヤリと笑みを浮かべる。

「咲夜」

「はい、お嬢様のプレゼントです。お受け取りください」

「おにぎりのように竹包みにくるまれた物を咲夜から受け取る霊夢。」

「何よこれ？」

「包みを開くと、出てきたのは赤く染まった一切れのケーキだった。」

「それが勇氣よ」

「甘いはずのケーキから微かな血生臭さを感じ、腕を震わせる霊夢。」

「なに言ってるのよ!？」

「それ咲夜に頼んで作って貰ったのよ。彼、骨の髄まで美味しかったわよ」

「霊夢の耳元で言うレミリア。その手からブラッドケーキが石畳に落ちる。」

「あら、勿体無い。それ、勇氣のエキスが入った最後の一切れだったのよ」

「帰って……帰れ！」

「参拝客に対してそんな言い方は無いんじゃないの？」

「うつむく霊夢。」

「勇氣を返して！ 生きてるでしょ？」

「彼、生きてたかしら咲夜？」

「いいえ、調理した物はお嬢様や妹様、紅魔館の者が全て平らげてしまいましたので、残っておりません」

「あら、残念ね。でも、残飯ぐらいはあるんじゃないかしら？ 欲しかったら紅魔館に来なさい。残版なら

いくらでもあげるわ」

うつむいたまま、霊夢はレミリアが去っていくまでずっとそのままだった。

「勇気……あんたが死んだなんて絶対に信じないから……」

一章 食材の宴

本来、食材があるべき調理台の上には裸の一人の少年、斎藤勇気の姿があった。

「君は誰!? ボクをどうするつもり?」

紙のシートのような物に寝かされ、両手足を縛られ、勇気は何もできない状態だった。

「私は十六夜咲夜、紅魔館のメイドですわ」

「メイド? メイドがどうしてボクを……?」

「レミアお嬢様の為にケーキを作ろうと思ひまして。なので、貴方を料理いたしますわ」

「ええっ!」

「逃げても無駄ですわ」

調理台の上にごろごろと転がろうとすると、押さえられ、片手で持ったボウルの生暖かい生地をまんべなくかけられてしまう。

「止めてよ!? ケーキなんかになりたくないよ!」

「そうね。では、ケーキになって良かったと思えるぐらいに気持ち良くなって貰いましょうか」

「えっ？」

咲夜によって強引にうつ伏せにされると、調理台に用意されたボウルの生地を背中にかけてしまう。  
「ぬるぬるして気持ち悪いかしら？ でも、こうすればどうかしら？」

咲夜によってゴムベラで生地が塗りたくられ、勇気の身体が跳ねる。

生暖かい生地がドロドロでぬるぬるの感触が身体を犯していき、徐々に気持ち良くなっていくようだった。  
「ふにゅっ!!」

「生地は卵を使っていますし、身体に良いのです。エステだと思っただけでそのまま身を任せてケーキになってくださいな」

咲夜は身体を押さえながら尻や足と手際良く慣れた手つきで生地を塗り広げていく。

「ひぐっ!! そんな事を言っても……ボクを食べる気でしょ？」

これがケーキの生地なら何をされるか分かる。生地が塗り終われば、焼かれてしまうのだ。

勇気が暴れると、咲夜の顔やメイド服に生地が飛んで汚れていくが、それすらも気にせず生地を塗り広げていく。

「そうですね。貴方の快樂がケーキを高級食材へと変えるので」

咲夜は勇気を仰向けにすると、新たなボウルの生地を股間へと注ぐ。

「ひっ!! そこは止め!!」

「止めませんわ。ここから良いシロップが取れますので」

そう言うって咲夜は勇気の股間をゴムベラで描くように生地を塗り広げる動作を繰り返す。

「はううううっ!?　そこはらめえええっ!?」

身体が大きく跳ね、勇気のメレンゲが生地へと吸収され、それを手早く塗り広げられてしまう。

「女の子のような声を出して可愛いですわね」

「やめて…:もう!?」

「もっとメレンゲ出ますわよね?」

咲夜はゴムベラを勇気の股間へとぐにぐにと強く押し付け、メレンゲを出すように促す。

「そんな強く押したら!?」

股間を強く押し付けられ、勇気の身体が再び、跳ね上がる。

どくどくと勇気のメレンゲが浮き出て、咲夜はそれを手早くかき混ぜ、身体に塗り広げていく。

「今度は手でかき混ぜてあげますわ」

新たな生地がかぶせられ、咲夜の手が勇気の身体を優しく撫でるようにかき混ぜる。

「ふみゃっ!?」

咲夜によって生地が塗り広げられ、勇気の股間へとその手が触れる。

「さあ、美味しくなるように生地にどんどんメレンゲを入れてくださいな」

咲夜の手が円を描くような動作が繰り返され、勇気の快感が絶頂に達する。

「やだっ!?　ケーキなんかになりたくないよ!」

耐える事ができず、生地にメレンゲを加えてしまう。



「そんな事を言いながらも、気持ち良くなってメレンゲを入れてくれたんですか？」  
「もう……焼くなり何なりすれば良いでしょ！　こんな惨めになるぐらいなら……」  
「死んだほうがマシですか？　ではお言葉に甘えて焼きましょう。お嬢様をお待ちさせるわけにはいきませ  
んし」

軽々と勇氣を持ち上げて天パンに乗せると、オーブンに放り込まれてしまう。

「ひゃっ!？」

「死にはしませんが、ふっくらしてもっと気持ち良くなりますわ」

暗いオーブンの中はサウナ以上に熱いような気がした。

身体の周りの生地が徐々にふわふわとした感触になる。

暖かくもふもふした毛皮のような感触がする。熱によって生地が膨らんでスポンジになっているようだった。

「何これ……気持ちいいよ……」

全身を愛撫されたかのような感触で、スポンジ生地にメレンゲを出してしまう。

「良い感じに焼かれているようですわね」

しばらくして勇氣の全身がスポンジに覆われると、咲夜は手早く天パンを取り出す。

「ふぁ……」

オーブンから取り出された勇氣はまるでスポンジでできたぬいぐるみのようになっていた。

「可愛くて美味しそうですね……では、仕上げですわ」

咲夜は動かなくなった勇氣に絞り器でクリームをまんべんなく塗すと、カッティングナイフで塗り広げていく。

ぬるぬるのクリームがスポンジに染み込み、身体を犯していく。何度も身体が跳ね上がりそうになったが、固まったスポンジが動く事を許してくれない。

咲夜が股間へとクリームを塗り広げると、増していく快感。

「そこ……やめて!？」

「ここですわね」

「ひにゆうううっ!？」

咲夜が股間へと何度もカッティングナイフを往復させると、快感に耐えられずにメレンゲがスポンジから漏れ出してしまふ。

「これで完成ですわね」

勇氣の全身のスポンジにクリームが塗りたくられ、様々なフルーツが乗せられた。

身も心も完全にケーキされてしまったようだった。柔らかいスポンジの抱擁と染み込むぬるのクリームが適度な快感が未だに纏いつき精神を犯していく。

それは永遠の幸せの抱擁だった。

「美味しいケーキになっちゃったよ」

「貴方はこれからお嬢様に美味しく食べられるの。嬉しいでしょ？」

「はい……嬉しいです」

そしてケーキになった勇氣の身体は部屋に運ばれていた。

「綺麗なぬいぐるみのような可愛いケーキね」

気づけば、一人の小さな少女の前に勇氣は捧げられていた。長テーブルの皿に乗せられ、ケーキとして出されていた。

「今回ののは特に自信作です。彼は身も心もケーキとなり、もはやお嬢様に食べられる事しか考えられない身体になりましたわ」

帽子を被り、コウモリのような翼を持つ若い少女は人間ではない事が見てとれる。

この娘がレミリアというお嬢様で、気持ち良く美味しく食べてくれるのだ。

「は、早く食べてください」

レミリアは溜息をつくくと、快楽で歪む勇氣の顔を持ち上げる。

「思った以上に壊れているじゃない咲夜。これが新聞を賑わせていた妖怪を襲う通り魔とは思えないわね。力を自慢するような奴だったらプライドをズタズタに引き裂いてやろうかと思ったのに」

嫌な顔で咲夜を見るレミリア。

「プライドをズタズタに引き裂いて食材として食べやすいように調理したのですわ」

「……食べて……食べて……食べて……」

呟くように言う勇氣。

もはや食べて貰う事しか考えられない身体となっていた。

「食べやすいようにね……良いわ。いただくわ」

レミリアの舌が勇氣の胸を舐め取ると、身体が大きく跳ねる。

「良い……胸が食べられてる……」

クリームで汚れるのも構わず、ケーキ化した勇氣をぬいぐるみのように抱き寄せると、むしろむしろと周りを食べていく。

舌や小さな歯が当たる度に身体がツボを押されたように快感を伴っていく。

「そこそこの味ね」

「……もつと……食べて……」

レミリアの舌が股間のスポンジへと触れる。

「ここが一番……美味しそうね」

「ひぐっ!？」

股間に乗ったチェリーと共に齧り付くと、勇氣の快感が絶頂に達した。

スポンジに漏れたシロップがレミリアによって残さず食べられてしまう。

「隠し味のシロップはなかなかね」

荒い息使いの勇氣に気にする事なく、手をつけていない肩に牙を当てる。



「……………？」

「でも、私が一番好きなのは血ね」

ザクツと何かが刺さる音と共に、勇気の身体に鈍い痛みと快感が走った。レミアリアによって身体の血がじゅるじゅると吸われていくのが分かる。

「……………ああ……………血……………吸われてる……………」

「貴方の血、思ったより美味しいわ」

口から漏れ出す血がクリームとスポンジを赤く染め上げていく。

感じた事のない快樂と共に意識が遠のきかける。

「……………ああ……………もやがかかって」

「ご馳走様……………咲夜、あとの残飯は妖精メイド達にでも食べさせてあげてね」

「はい、かしこまりました」

メイド服を着た妖精達が皿に乗った勇気を取り囲むようにする。

「特大ブラッドケーキなんて食べるの久しぶり」

「美味しそうね」

きつとこの妖精達にも美味しく食べられてしまうのだろう。

自分の全てが食べられる。それは嬉しい事のように思えた。

「……………ボクを食べて……………」

「ボクを食べてですって」

「可愛い♪」

「じゃあ、美味しくいただきますよう」

「いただきます」

一人の妖精が舐め始めるのを皮切りに、妖精達が群がり、勇気に付着したケーキを犬のように貪り始めた。舌や小さな歯が当たる度に快感が伴い、身体が跳ねてシロップが漏れる。

快感と疲労感、出血によって身体は限界だった。

勇気の意識は闇の底へ沈んでいった。

こうして勇気は……残飯として妖精に身も心も美味しく食されてしまったのだった。